

高校における生活指導研究（?）

著者	諸岡 康哉, 生活指導研究グループ, 穴田 述, 板坂 洋介, 寺島 美紀子, 松浦 みどり, 宮嶋 公夫
雑誌名	教育工学研究 = Studies in educational technology
巻	13
ページ	1-8
発行年	1987-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/24796

高校における生活指導研究(V)

諸岡康哉* ・生活指導研究グループ**

本研究グループは、マカレンコの一連の著作の検討を基礎にしながら、一方では、自分達のかかえている高校現場での生活指導実践の検討をおこなってきた。(その成果については、『教育工学研究』第9、10、11、12号に掲載)

本年度は、マカレンコの実践がほぼ完成に近づいてきていた1930年当初のジェルジンスキー・コムーナを背景に書かれた文学的作品としての「塔の上の旗」(『マカレンコ全集、第IV巻』明治図書、所収)を取り上げた。(この作品のなかでは、マカレンコはザハーロフとして、ジェルジンスキー・コムーナはメーデー・コムーナとして描かれている)

以下の論考は、本研究グループでの一年間にわたる集団討議・検討の成果を穴田が責任執筆し、それを諸岡を中心としたグループ員らが加筆・修正したものである。

(なお、論考のなかで頁数のみ表記されている場合は、上記のマカレンコ全集、第IV巻の頁数を示している)

「塔の上の旗」についての考察

はじめに

マカレンコの「塔の上の旗」は非常に平易な文で書かれていて大変読みやすい。けれども、そのために表面的に読み流してしまいがちになり、彼のこの作品のテーマの本質に迫ることが

かえって困難であった。

マカレンコは、この作品の展開の上で重要な人物として、イーゴリ、ヴァーニヤ、ワンダ、そしてルイジコフの4人を登場させている。このうち前の3人は「メーデー・コローニヤ」で生活する中で変革を成し遂げ成長した人間像として描き出され、ルイジコフに関しては集団の中においてすら全く自己変革・成長を果たし得なかった人間像の典型として描き出されている。また、ルイジコフが入所してきた後には、彼によってひきおこされる窃盗をめぐるコローニヤの中の人間関係には様々な軋轢が生じ、メーデー・コローニヤは大きく揺さぶられることになる。

本稿ではこの作品の中の数あるテーマのうちから、最後には指揮官会議の書記に任命されるに至ったイーゴリを取り上げ、彼の成長の上で変革の節目となったのではないかと思われるいくつかの場面に焦点をあてて若干の考察を試みたい。それにその上で、今日の高校を取り巻く状況との比較を通して、少しでも高校が現在かかえている問題点を明らかにしたいと考えている。

1. 外観の美しさについて

(1) 「メーデー・コローニヤ」との出会い

16,7才のやせたのっぽの若者であるイーゴリは、当時数多く存在した浮浪児のひとりである。彼は郵便局で100ルーブルを詐取して逮捕された。

* 諸岡 康哉 金沢大学教育学部
** 穴田 述 石川県立寺井高校
板坂 洋介 石川県立金沢向陽高校

寺島美紀子 石川県立松任農業高校
松浦みどり 石川県立金沢向陽高校
宮脇 公夫 金沢市立工業高校

その結果、非行を働いた子供達が収容されている「メーデー・コロニー」に送られてくる。メーデー・コロニーについてはイーゴリ自身が逮捕直後に次のように語っている。

「ヴァーニャ、おまえ、コロニーに行ってみな。なかなかいい所らしいぞ。『メーデー・コロニー』だ。」(p.28)

この言葉で示されているように、イーゴリにとってコロニーは最初からそんなに悪いものとしては映っていない。それゆえに、彼はコロニーをたいした抵抗もなく、というよりはむしろかなり快いものとして受け入れていくことができるのである。

ところで、イーゴリの性格にもまたコロニーの生活を通して成長していくことを予感させるものがいくつか見いだすことができる。からまれているヴァーニャを助けたことに見られる正義感、ザハーロフに「きみは多少ひとをばかにする癖があるね？」と言われて顔を赤らめる純情さ・素直さ、やかましいすれっからしの浮浪時の群れやそのうすべらな機知やひくい教養が好きではなかったこと、高等教育には反対でなかったことなどにイーゴリがコロニーを受け入れ成長していく素地を見ることができる。(p.12~13、p.38、p.47、p.66)

このように基本的にはイーゴリがコロニーを受け入れる条件はかなり揃っていたように思えるが、それを決定的にした大きな要因は2つあると考えられる。

まず第1にあげられるのは、清潔で美しく保たれた環境である。コロニーで生活している子供たちの服装や自分に支給された衣服建物の清潔さ美しさが彼の心を和ませてくれるのである。最初は建物の内部のいかめしさに威圧感を覚えるが、たちまちのうちにその美しさが気に入る。また通学服姿に身を包んだ鏡に映った姿を見て、自分の顔に何か新しいものさえ発見するのである。(p.65)

マカレンコは「ソビエト学校教育の諸問題」で次のように述べている。

「わたしは、子どもがそこで生活してみたいと思うような、そこを誇りとするであろうような集団、そういう集団が外からみては美しくないなどということを、想像することができません。生活の美学的側面をないがしろにはなりません。……服装や、へやや、階段や、工作機械の美学は、行動の美学にいささかもおとらないほどの意義を持っています。」(『マカレンコ全集、第VI巻p.206)

マカレンコのこのような集団は外観も美しくなければならないという主張は、厳しい要求をすべての人に突きつけていたが、この要求の結果としてのコロニーの美しさがまずイーゴリをコロニーへ感覚的に接近させる重要な役割を果たしているといえる。しかもこのコロニーにおける清潔さ、美しさは集団を維持することの誇り、名誉の表れであり、構成員たるコロニストたちひとりひとりの自覚のもとに生み出された結果である。単に形式的に外観を取り繕ったものとは異なり、生命が吹き込まれたものである。つまり、外観が美しく維持されていることは逆にここでのコロニストたちの生活のスタイル、調子がいささかも崩れていないことを示しているわけであり、この躍動感がイーゴリの心を捕らえたと言いうことができるかもしれない。

第2の要因としてあげられるのは、ザハーロフや老教師ニコライ・イヴァノヴィチに象徴的に見られるように、たとえ相手が非行を犯した子供であっても対等な人間として、誠意を持って丁寧な態度である。イーゴリは学校での面接においてこの老教師の見だしなみや言葉の丁寧な調子がたちまち気に入り、かれ自身も何ら抵抗感もなく素直な心で丁寧に応待するようになるのである。

しかしながら、勿論イーゴリはすんなりとこれらのことを受け入れたのではなかったことは言うまでもない。この間も急激な外部の変化のために内部では絶えず激しい葛藤が渦巻いていたのである。

「かれはなぜかわからないが、自分を憤慨させるようなもの、怒りと抗議をよびおこすようなもの、でなければ、ふざけたくてたまらなくなるようなものに出あいたくなかった。むしろに出あいたくなかった。実際、朝っぱらからかれは自分自身に対決をせまられ、不可解な毅然とした。しかも丁寧な力に直面していたのでは、やりきれなかった。……はたして作業隊もこのように冷静に自分をつるしあげるのだろうか？」(p.70)

(2) 高校の現状との対比において

こういった視点から、今日の高校の現状をかんがみると、はなはだうすら寒い様相を呈していると言わざるをえないのではないだろうか。

校舎内に一步足を踏み入れると、たしかに正面玄関付近は清潔に保たれているものの、教室や廊下の隅々には埃がたまり、壁面にはかなり落書きの跡が消されずに残っているというなげかわしい姿をさらしているのが大部分を占めるのではなからうか。ゴミ箱からはごみがあふれ、掲示板上では黄色く変色した紙がかろうじて押しピン1個で命をつなぎ、窓からの微風にヒラヒラと踊っているという教室の光景が一般的ではなからうか。

このような教室の姿が端的に表しているように、建て前としては環境の美しさが強調されているものはいるものの、現実には「美しさ」「清潔」の問題が欠くべからざる主要な課題として多くの教職員には意識されていないのである。教育の根幹にかかわる問題であるという認識に欠け些細な事として受け取めることが多いのである。

マカレンコは先にあげた「ソビエト学校教育の諸問題」の中で、「この清潔という要求は非常にきびしく励行されねばならないもの」であり、「要求をちょっとでもさげると調子がくずれ、スタイルがくずれ」「集団の生活のなかにはこのような些事が非常に多いのですが、まさにそういうことをもとにして、集団のなかになくならない行動の美学が組みたてられてゆくので

ある」と述べているが、今日の高校現場ではこの指摘を十分に検討することが要求されているように思う。(第VI巻p.208~210)

2. イーゴリの職場放棄 (1) 職場放棄に到る経過

メーデー・コロニヤに入ったイーゴリはネステレンコが隊長をしている第8作業部隊に所属することになる。養護者のイーゴリには、指導者としてサンチョ・ゾーリンが任命された。

イーゴリ自身は「まじめな働き手には少しも悪意はもっていない」が、「自分で何もしたこともなく、働きたくもなかった」(p.66)そのために仕事をめぐって最初は多くのトラブルをひきおこすのであるが、そのたびに古い自己との対決を迫られ脱皮していくのである。

最初は仕事に出ることに反発していたイーゴリもサンチョとの話の中で「ひとつためしに働いてみてもいいなという単純な希望がおこってき」て、「そうすれば多分この連中に多少の信頼を示すことができるわけだ」(p.96)とまで考えるようになる。さらに「つめ」騒動のあとでは、指揮官ネステレンゴを慰めることができばうれしいと思い、組立職場に行くことを承諾する。

彼が組立職場で与えられた仕事はプロノシカミがきであった。仕事らしい仕事をしたことのないイーゴリは悪戦苦闘する。粗ヤスリで指の皮をむき血が出て来て大騒ぎをした上に、ハチやハエが飛んできてかっとして怒鳴ったために皆に笑われ、職場放棄をする結果となった。そんなイーゴリの姿を尊敬の念で見られる顔もいくつかあり、彼は誇りを感じる。

けれども彼の期待に反して、堂々たる作業拒否である職場放棄には注意が払われず、たいした話題にもならなかったばかりか、ゴンターリの切ったつめのゆくえのような愚にもつかぬことに興味もたれ、彼は腹を立てる。

さらに、本当に罪のあるゴンターリが罰せられず、報告書を提出にいった副官オスタープチンが報告時における動作不良と隊における不潔

故をもって謹慎し時間という罰をうけるようになったことに対して、腹だたしく思い気分を害するのである。

(2) 指揮官会議でのイーゴリの揺れ

以上のような経過で、イーゴリは指揮官会議に呼び出されることになるのだが、この場面で問題となるのは「ぼくは働きたくないとは言いません！ただ組立職場では働きたくないのです。それにぼくには不適當なんです。プロノーシカをみがくなんて、いったいどんなみがあるというんです？」という彼の利己主義的な考え方であり、彼はここで鋭く自己変革を迫られることになるわけである。(p.113)

最初の彼の挑戦的な発言に対して、すわっている少年達の「顔には焦燥といまじさがあらわれてい」て、イーゴリはいくばくかの余裕を持って会議に臨むのであるが、次のような議論の展開の中でたちまち打ち砕かれ、コロニーヤを追い出されるのではないかという不安な気持ちを抱くまでに追い詰められるのである。(p.114)

「かれから着物をはぎとり、がらくたをわたし、でて行け！と、ひとりを追い出せば他のものにも見せしめになるんだ。」

「なぜおれたちはかれを食わせなくちゃならないのだ。なぜだ？追いだせ、たたきだせ。」

「追いだしてはだめだ、墮落してしまう。」

「墮落するなら、させてしまえ。」

これに対してマルク・グリーンハウスが「追放」の誤りを指摘しながらも、イーゴリの利己主義的な態度の誤りをも明らかにし、彼に自己変革をするよう鋭く迫るのである。

「イーゴリはほかのところで働くといっている。それを許すことはできない。社会主義的部門には規律がなければならない。……コロニーヤではどのようなわがままも許されない。しかし追放はいけぬ。だがかれをそのままに放っておくとはすすめない。もしかれが社会主義的規律にしたがいたくないというならば、かれを

送る必要がある。」「かれをどこかの幼稚園に送る必要がある。」(p.116)

この討議の展開の過程で、イーゴリの気持ちからもかたくななものがしだいに消え失せ、「そこに立っていることも、一同の顔を見ることも、ペチカのような提案をきくことも、はずかし」く感じるようになるのである。(p.116)

「なんだって？かれらはすぐにいい同志になったのか？きみはかれをどこに追放するというんだ？また送るというんだ？それはわれわれの不幸だ。白い手のなまけものをここに送ってくる。われわれとしてはその面倒を見る義務があるのだ。」(p.117)

ヴォレンコのこのことばでイーゴリの心はほのぼのとしたあたたかいものに包まれる。そこにはもはや、肩をいからせ必死につっぱっていた姿の影さえうかがえない。

最後にザハーロフが理路整然と、しかも厳粛に語りかけ、イーゴリも自己の非を悟るわけである。

「きみはわれわれの家族のひとりだ。きみは今自分のことだけを考えることはできない。われわれみんなのことも、コロニーヤ全体のことも考えなくてはならない。人間は孤独では生きることができないものだ。きみは自分の集団を愛し、それに親しみ、その利益を知り、それを大事にしなくてはならない。それをぬきにしては、人間らしい人間になることはできない。なるほど、今、きみにとってプロノーシカをみがく必要はないだろう。しかし、それはコロニーヤにとって必要である。つまり、きみにとっても必要であるのだ。……われわれの援助によってきみは、われわれ集団の一員として、きみの希望通りのものになれるだろう。プロノーシカ、それはつまらぬものである。しかし、人は肉がないときには、黒パンをたべる。そしてそのパンに感謝しなくてはならない。」(p.118~119)

その後、イーゴリは「プロノーシカみがきに対する否定的な態度はかくしはしなかったが、指揮官会議でいったん約束したからには、それ

を果たす義務があると考え」(p.136)るまでに成長したのである。

(3) 若干の考察

少々長くなったが、このイーゴリの職場放棄を追求する場面は多くの示唆を与えてくれるように思う。

まず指揮官会議での追求を通じてイーゴリに変革を成し遂げさせたものはいったい何であったのであるかについて考えてみたい。

追求の最初の場面ではゴンターリやズイリヤンスキーの発言にみられるように、他人への見せしめのために追放すべきだというかなり強硬な意見が前面に出てくるが、追及全体を通しては決して単なる非難の言葉の暴力には陥っていない。つまり、言わゆる「つるしあげ」という事態にはいたっていないのである。一人一人が自分の思いを単刀直入に述べ胸のうちを明かしていくなかにも、集団としての要求をイーゴリにつきつけ、彼に判断を迫っているように感じられる。コロニヤでともに歩んで欲しいからこそ真摯な要求をもってイーゴリに迫るのである。残念ながらゴンターリやズイリヤンスキーの発言では言葉足らずな面があり、イーゴリには不安と恐れを与える感じが強くなるが、マルクやヴォレンコの発言でその真意がイーゴリにも理解され始めるのである。

また、ザハーロフは、集団の中における個のかかわりについて明確に説明している。人間は孤独では生きられず、集団を形成するが集団に属する限り自分だけのことを考えることは許されず、当然集団全体のことを考えることも要求されるということ、それ故に自分だけという利己主義は決して認められないことを明らかにし、この集団と個のかかわりを通じてこそ本当に人間らしい人間になれることを示しているのである。

誤りを憎んで人を憎まずという姿勢と、人間として敬意を払うが故に要求を出すという態度がイーゴリの心を揺るがす大きな要素であった

ことは間違いがないが、同時にこれらの議論がイーゴリの眼前で行なわれたことも重要な役割を果たしているのではなかろうか。別室で審議した結果をイーゴリに伝えただけでは決して彼にかくも鋭く変革を迫ることができないのではないか。一人一人の発言にこめられる感情・内容の激しき・鋭さにイーゴリの心は右に左にと大きく揺れ動き、その振幅を狭める過程の中でザハーロフの言葉もストンと胸におちたのではないかと思う。

また今回は労働をめぐるの問題であったが、ザハーロフはイーゴリに対して、プロノーシカみがきという小さな仕事が国家建設のために、また人間の成長のためにいかに重要であるかも具体的に例をあげて説明していることも見逃してはならない点である。ただ単に精神的道徳的に労働の価値を訴えてはいないのである。全体の中に占める部分の位置を明らかにすると同時に、全体としての仕事がいかに人間、集団の成長にとって価値あるものであるかを訴えているのである。

次に以上のような観点から現実の高校の姿を眺めてみたい。

現在高校では一人の生徒の存在意義をめぐる議論の場としては2つ考えられる。ひとつは成績をめぐる議論される進級、あるいは卒業判定会議であり、もうひとつは生徒が問題行動を起こしたときに開かれる処分を審議する会議である。

これらの会議では、指揮官会議の場合とは全く異なり審議の対象者を参加させることはまずありえない。生徒の状況は担任や係の教師によるきよりの結果が間接的に報告され、一方、会議の結果についても主として担任を通して間接的に伝えられるだけである。そのため双方にとっては、お互いの生の感情が伝わってこず、誤解に対する釈明の場も与えられることが困難な状況におかれている。

したがって、イーゴリの追及の場合に見られる感情の揺れによる理解、教育の効果は全く期

待することができない。たとえ傍聴でもよいかから該当者が審議の場に立ちあえる道を開くことが真剣に検討される必要性を痛感する。

労働の価値という点においては、社会構造の複雑さ、価値観の多様化を反映して、現在高校はザハーロフのように生徒に対して明確に説明しえないでいる。本来は、卒業後すぐに就職する生徒、あるいは進学する生徒の別を問わず、きちんとした労働観を身につけさせ、さらには学習とのかかわりをも明らかに示してやる義務を負っていると思われるが、現実には学校の世間的評価が生徒の就職先、進学先によって決められるために、本質的な追求は全くといっていいほど行なわれず、目先の個人的利益追求に矮小化されてしまっていると言える。同時に、労働の質を問うことなく精神的・道徳的に労働は価値あるものとしてその価値観を一方向的に押しつけるために、本来労働のもつ喜びを見いだすことを一層困難にしている。これは大人社会において社会のしくみが複雑になり、また意図的に労働の意義が個人的な次元に押しこめられてしまい、社会の進歩との関係がわかりにくくされていることの反映であり、そのことが高校の予備校化現象に拍車をかけ事態をさらに深刻にさせていると思われる。

3. 「あなたに手紙です」

イーゴリはコロニーヤに入ってから2度、罰を受ける。最初の罰は、部隊日直であったにもかかわらず、早朝読書にふけていて点呼前の掃除がまにあわず与えられたもので、その内容は半時間ほど要する小道をはいて砂をまく仕事であった。2度目の罰は、オクサーナに接吻をしたために与えられたものである。

ところで、マカレンコは「塔の上の旗」では罰の形式として4つあげている。(p.178)

- ①処罰命令—比較的簡単な規律違反に対して課せられ、軽い作業がその内容となる。(p.138)
- ②謹慎—一定の時間所長ザハーロフの執務室に拘束される。そこではザハーロフとの対話が

なされる。(p.106 p.190~191)

- ③執務室への呼び出し—一定の時刻を指定して執務室へ来ることを命じる。(p.179)
 - ④階列前の譴責—重大な規律違反に対して隊列の前に呼び出し、譴責を言いわたす。(p.220)
- オクサーナに接吻をしたイーゴリは、その後自分がオクサーナにほれていることがみんなに判明し総会の場で追及されることを頭に浮かべ、身もちぢむ思いに打ちのめされる。コロニーヤから逃げ出さなくてはならないという考えさえ頭をかすめるのであった。翌朝イーゴリはザハーロフからの手紙を受け取る。そこには「チェルニャーヴィン君、今夕『就寝ラッパ』後、話がありますから、わたしのところに来てください」(p.180)と書かれているだけであった。すなわちこれが今回の罰であったのである。

後は朝食後ザハーロフに会う。

「先生、ぼく、手紙をうけとりましたが、今ではだめですか？」

「だめです。なぜ？……晩とお願いしたはずですが……」

「ぼくには、あの、……今の方が都合がいいのです」

「わたしは晩のほうがつごうがいい。」(p.181)

うつつと重く沈んだ心のイーゴリは一刻も早くこの気分から逃れたいためザハーロフに懇請するが、すげなく断られてしまう。

ようやく指定された時が訪れ、イーゴリは執務室に入り、2人の間には次のような対話がなされたのである。

「わたしからあなたに何か話さなくてはなりませんか？それとも、いわれなくてもきみは何もかもわかっていますか？」

「先生、みなわかっています。……ゆるしてください！」

「みなわかりますか？それはよろしい、あなたは名誉を重んじる人だとは思っていました。つまり、あす、あなたは、なすべきことをぜんぶするでしょうね？」

「します」

「いったい、どういうぐあいにそれをしますか？」

「どうって、ぼくはわかりません。ぼくはいます。おねがいします。許してくださいと。……オクサーブに。」

「そう……、それでいいんでしょう……正しい。さようなら、かえってよろしい」

「先生に、あとで、報告しますか？」

「いや、その必要はない……あんたがそれをはたすことをちゃんと知っています。報告の必要はありません」(p.183)

驚くべきことには、2人の間ではたんたんとした雰囲気と言葉がかわされ、感情の高ぶりといった様子が全くうかがえないのである。

「かえってよろしい」と言われたイーゴリは喜びすら感じている。

このように展開されるものをマカレンコは「延期された対話」と呼んでいるが、私たちはこの「延期された対話」のもつ教育力にもっと着目し、実践の中で有効に使うべきではなかろうか。

外見的にはこの罰の形式は罰をおかした者をすぐに呼びつけて叱責することと比較すれば非常に軽そうに感じられるが、実際にははるかに重い内容を含むものであり、人間の成長を促す前向きの罰である。一般的には人は罰をおかしたときには罰せられたことにより問題は解決されたという気持ちに陥りやすく、その後には与えられた罰は彼にとっては精神的肉体的抑圧にすぎないものになってしまう危険性が潜んでいる。

これに反して「延期された対話」では、指定された時刻まで問題の解決が持ちこされることになり、精神的には宙吊りになった不安定な状態に追い込まれるわけである。その間イーゴリのように一人で悶々と悩んだり、友人に相談したりして精神のより安定した状態を求めて行動を起こすことになる。つまり自分のおこした事件をつきはなし再度とらえなおすというように、自分の行動を客観視することができる「内なる眼」を育てる機会を与えられるのである。待機している間にすでに自分で自己の反省をし、結

論をだしているわけであるから、顔を合わせたときにはただその確認をするだけでよく、かえってザハーロフが「あんたがそれをはたすことをちゃんと知っています。報告の必要はありません」と述べているように成長の跡を喜びあえることさえ生じてくるのである。

このような「内省」の力、自己を「客観視」できる力は人間の自立にとって欠くことのできないものであり、イーゴリもこの事件を契機として大きく成長したものと思われるのである。

4. ワシーリエヴナとの出会い

イーゴリはコロニーにおける生活では目覚ましい成長を遂げていくが、学校での姿はもうひとつパツとしない状態が続いていたようである。が新任の女教師でひじょうに若いコムソモールカのナジェージュタ・ワシーリエヴナとの出会いにより終止符が打たれることになる。

彼女はイーゴリにすばらしい文学的才能が潜んでいることを発見する。これを契機としてイーゴリの文学への取り組みは情熱をおび成績もよくなるが、他の課目については成績があまりかんばんしくない所以她は不審に思い彼に尋ねたところ、興味がないという答えが返ってくる。それに対してワシーリエヴナは学習を興味という点だけでとらえているイーゴリの考えの誤りを次々と明快に指摘していくのである。

「ほかの課目がわるければ、あなたには文学も必要はありません」

「あなたは何を書こうというのですか？」

「いったいどんな生活を？」

「誰の恋愛について？」

「誰か、ある人なんかはいません。人はみな何かしらしており、どこかに働いており、さまざまな喜びや不快なことを持っています。誰の恋愛をあなたは描くつもりですか？」

「どの課目の先生が？」

「それごらん、たとえば数学の、でしょう。あなたが数学を知らなければ、いったいどう描くつもりですか？さいごにいいますが、恋愛ば

かりがテーマではありません。生活というものはとても複雑なものです。作家はひじょうにたくさんの方のことを知らなくてはなりません。あなたが文学以外に知らなければ、何も書けません。」

「わたしは繊維物質の工学も知っています。そのほかに化学をよく知っています。わたしは前に工場で働いていたし、技術学校に学んでいました。あなたは教育のある人にならなければなりません。イーゴリ、あなたはなんでも知らなくてはなりません。」(p.306~p.307)

イーゴリはワシーリエヴナの言葉を通して初めて教育の重大さ、総合的に学ぶ意義を悟り、心機一転してあらゆる課目に力をいれて勉強し始めるのである。勉強は興味の対象となるものではなく、人間の成長に不可欠の要素であることを理解することは、イーゴリがコムソモールに入り、ネステレンコが上級学校の受験の準備に入ったあとでは第8作業部隊の指揮官に選ばれ、最後にはトールスキーのあとをうけて指揮官会議書記に選ばれるまでに成長していく上で重要な位置を占めているのではなかろうか。

最後に、この頁においても高校の現状に触れておきたい、今日、どこの学校においても以前に比べて生徒が勉強しなくなったという嘆きの声がよく聞かれるが、これは生徒だけの責任に帰するわけにはいかないと思う。このような状況を招くようになった主たる原因はむしろ大人の側にあり、高校の存在意義を就職・上級学校進学への通過壁の一つにすぎないものにおとしこませてしまっていることにある。そのため学習をワシーリエヴナが述べているような総合的なもの、人間が人間らしく生きるために必須なものとしてとらえることができなくなり、試験を突破するための手段としての見方が大勢をしめるようになってしまっている。教育過程の編成も、いかにしたら入試にとって有利かという観点が中心となっていることも多い。これでは生徒が学習を苦役としてしか受けとめられなくなっているのも無理からぬことと言える。

おわりに

本稿ではイーゴリの成長の契機について若干の考察を試みるため、直接イーゴリについて描かれている4場面をとりあげた。しかしもちろん彼はこの場面だけで成長を遂げたのではなく、メーデー・コロニヤの中での様々な生活が有機的に結合した結果であることはいうまでもない。メーデー・コロニヤ全体の生活を分析する中でさらに有益な示唆が与えられることと思うが、今後の検討課題としたい。